1字漢語のアクセント―漢語の類別語彙を考えるために―

加藤　大鶴

1　本稿の目的

日本語アクセントの歴史的研究では、古く金田一春彦 1937 によって比較言語学的手法と文献学的手法との両輪を組み合わせることが基本的な方法とされ、それらを組み合わせて得られた類別語彙（金田一語類）が活用されてきた。その結果、京阪地方を中心とした平安末期から現代に至るまでのアクセント変化や、京阪地方から各地方へどのようにアクセントが分岐・統合を経て変化していったのかが明らかにされている。しかしその主たる対象は漢語輸入以前から日本に存在していた和語であり、漢語や外来語などの借用語は歴史的研究の埒外に置かれてきた。

ところで現代語諸方言における漢語アクセントが中国語原音の声調をどの程度反映しているかについて、概括的な研究を行ったものに奥村三雄 1974、金田一春彦 1980a があることが知られている。奥村は奥村三雄 1955・奥村三雄 1961 ほかにおいて、「由緒深い漢語」のなかには諸方言間で和語に相当するアクセントの対応を持つものがあることを指摘し、このことを根拠に諸方言アクセントに分派する前に漢語が輸入されたことを明らかにした。さらに奥村は中国語原音声調と漢語アクセントの方言間対応をみるために、現代の東京・京都・鹿児島の漢語アクセントと、文献資料との対応関係を調査している。一方、金田一は全国 20 の方言[*1]から対応関係を探り、和語の類別語彙に相当する語群を設定しようとする。両者は伝統的な漢語アクセントに方言間対応があること、それらには文献資料からも説明がつくものがあること、という大筋で一致している。ただし、いくつかの語については各方言におけるアクセント型の認定に異なりがあることも認められる。中央式周辺部の調査結果を加味して秋山英治 2017 のように新たに漢語類別語彙を検討する動きもあるが、それを除けば奥村・金田一以後、この方面の研究には目立った進展は見られないように思われる。

京阪地方に限定すれば、現代語と中国語原音との関係を探ろうとしたものとして前田広幸 1998、前田広幸 1999、前田広幸 1999、前田広幸 2000 があり、また中国語原音の声調と近世の漢語アクセントおよび現代京都アクセントの関係を論じた上野和昭 2011: 244-297 がある。近世の漢語アクセントと中国語原音の関係を論じたものには蒲原淑子 1989、近世以前までの漢語アクセントの変遷については加藤大鶴 2018 などがある。しか

[*1] 京阪式方言から 6 地点、東京式から内輪・中輪・外輪を含む 12 地点、長崎・鹿児島それぞれ 1 地点ずつを対象とする。なお各地点のアクセントの正誤は金田一春彦 1980b にある。

しいずれも漢語全体を通じて方言や文献資料との間にどれほどの対応関係が見られるのかを明らかにはしていない。

さて本稿では、現代諸方言の漢語アクセントが上記で見たような伝統性をどれほど反映しているかについて、大きく次の 3 つの観点に拠りながら考えてみたい。

(1) 東京・京都・鹿児島における漢語アクセントの対応関係

(2) 異なる音節構造ごとのアクセント型の偏り

(3) 文献資料との対応関係（中国語の原音声調含む）

諸方言間の対応を重視する立場からこの問題を捉えるには、2 字以上（2 拍〜4 拍）の漢語を対象としたほうがよい。しかし通時的研究の立場から原音声調との関係を捉えようとすると、2 字以上では連音上の変化など様々な要素を考慮に入れる必要が生ずるので、本稿では問題をシンプルに捉えるために 1 字漢語のアクセントを分析対象とする。

2　分析対象と資料について

秋永一枝 1996 では、秋永一枝 1998 を用いて、東京弁において漢字 1 字で 1 拍に発音される語のアクセントについて分析を加えている[*2]。

表 1（秋永が掲げる 39 例のうち 5 例を説明のために抜き出したもの[*3]）では、古く使われてきた固定的な言い回しのなかにアクセントの古形が残存するという見立てと、秋永が経験のなかで知覚したアクセントの変化、さらに楳垣による京都アクセントの対応関係に基づいて、より古いアクセントが推定される。

この表から「五」「魔」「部」はそれぞれ東京弁アで 0 型：京都アで H0 型で対応することが分かる。これによって「五」「魔」の東アは 0 型が伝統的で 1 型が新しいことが推定されるというわけである。さらに 20 の方言アクセント間対応を参照する金田一によって、この語が和語 1 拍名詞第 1 類に相当することが分かる。

ところが、上記の「部」について平山輝男 1960 では、秋永が示した東京 1,0 型：京都 H0 型という対応だけでなく、鹿児島 B 型を添えている。東 1,0/京 H0/鹿 B という対応は和語のアクセント型類別には存在していない。したがって「部」は「五」「魔」のように第 1 類相当とは言えないことになる。文献資料に目を向けてみると、「部」は広韻で全濁上声・呉音資料で平声である。その音形は呉音「ブ」・漢音「ホウ」であるから、「部（ぶ）」

*2 (1) 字音語体言のうち、1・2 拍語では 1 型が圧倒的に多い（1 拍体言に平板型が少ないのは和語も同様）、(2) 慣用句や連語の一部には 0 型が保持される傾向にあるが、その他は 1 型に変化しやすい（和語（「間に合う」「身が持たない」）・漢語（「魔が差す」「愚にもつかない」）、(3) 専門語による平板化などによって 1 型から 0 型が派生する場合もある。（秋永一枝 1996）

*3 東アは東京弁アクセント、京アは楳垣実氏の京都アクセント、金語類は金田一春彦 1980a による分類、早語類は早稲田語類を示す。

は呉音形と考えてよいだろう。「平濁ブ」［古今］なども資料に見られる。平安末期における「部（ぶ)」が平声＝L であったとするならば、第 3 類相当にふさわしいが現代諸方言の対応はそうはなっていない。

語例	東ア	用例	京ア	金語類	早語類
五（ご）	0, 新 1		H0	補	1
魔（ま）	0, 新 1	（～が差す）	H0	補 1	4 → 1
部（ぶ）	1,0		H0		
気（け）	1,0	用例により東京ア．変わる。	L0	補 3’	3 #
地（じ）	1,0	（～でゆく．0）	L0	補 3	

表 1　東京弁アで平板型の語（秋永一枝 1996: 148 を改変）

「気（け)」「地（じ)」は東ア 1 型：京ア L0 型で対応すること、および金田一の分類を参照することで和語名詞第 3 類相当とみなすことができる。したがって東アの 1 型が古いと言えるが、「地（じ)」に関しては用例に「～でゆく．0」ともしている。「地（じ)」は平山輝男 1960 では、東 1 型/京 L0 型/鹿 B 型としており、第 3 類相当であることが確かめられる。文献資料に目を向けると、広韻で全濁去声・呉音資料平声、「チ（ニ）平濁・十(斗)」［四座］であるから、平安末期における「地（じ)」は平声＝L であって、対応関係にかなう。とするならば、秋永の「～でゆく．0」のほうが新しいことになる。

以上から分かるように、漢語アクセント型の対応関係を検討するためには、方言間対応と文献の両方に目配りをする必要がある。そこで本稿では次のアクセント資料を用いる。(1)～(3) は方言資料、(4)～(6) は文献資料である。

(1) 秋永一枝編 1998『楳垣京都アクセント　基本語資料―東京弁アクセント付き―』アクセント史資料索引 13（秋永一枝 1998）

(2) 中井幸比古編著 2002『京阪系アクセント辞典』勉誠出版（中井幸比古 2002）

(3) 平山輝男編 1960『全国アクセント辞典』東京堂出版（平山輝男 1960）

(4)『大宋重修広韻（広韻)』（漢音系字音の原音声調を知るために用いる）

(5) 呉音資料[*4]（呉音系字音の原音声調を知るために用いる）

[*4] 呉音資料は次のものを用いた。『金光明最勝王経音義』(『古辞書音義集成 12　金光明最勝王経音義』汲古書院,1981 年)、『観智院本類聚名義抄』和音・呉音…鎌倉初期写（『天理図書館善本叢書　観智院本類聚名義抄』八木書店,1976 年, 参考：沼本克明「呉音・漢音分韻表」『日本漢字音論輯』汲古書院,1995 年)、『九条家本法華経音』(『古典保存会複製本所収　九条家本法華経音』,1936 年, 参考：沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』武蔵野書院,1982 年)、『法華経音訓』(『日本古典全集』所収, 参考：島田友啓編『法華経音訓漢字索引』古字書索引叢刊,1965 年)、『保延本法華経単字』(『保延本法華経単字』

(6) 文献資料[*5]（各時代におけるアクセント型を推定するために用いる）。

本稿では、秋永一枝 1998 における 1 字漢語（1 拍語 133 例・2 拍語 661 例）を音節構造ごとの分析対象とする。また、方言間対応を見るときは平山輝男 1960 と対照可能な 1 拍語 87 例、2 拍語 397 例を分析対象とする。

3　1 拍漢語

3.1　アクセント型の分布

最初に、秋永一枝 1998 を用いてアクセント型の分布を見る。表 2 では東京弁アクセントについては秋永が指摘するように漢語・和語とも 1 型が多く、その傾向は漢語に顕著であることが分かる。表 3 では京都の漢語アクセントについて、楳垣（秋永一枝 1998）・中井幸比古 2002・平山輝男 1960 を比較した。いずれも H0 型が圧倒的多数である。以上から、1 字 1 拍漢語の多数型は、東京式アでは 1 型、京阪式アでは H0 型であることが分かる。

	0	1	併記	合計
漢語	27	90	16	133
和語	33	49	8	90

表 2　アクセント型の分布　1 字 1 拍漢語と和語の比較（東ア）

ア型	楳垣	中井	平山
H0	119	115	67
H1	3	4	5
L0	18	24	13

表 3　アクセント型の分布　1 字 1 拍漢語（京ア）

3.2　アクセント型の方言間対応

表 4 は平山輝男 1960 における東京・京都・鹿児島の対応に基づいてそのパターンを 12 に分け、所属する語数を集計したものである。語数欄の（　）には本稿の検討を経て所属

古辞書叢刊刊行会,1973, 参考：島田友啓編『法華経単字漢字索引 』古字書索引叢刊,1964 年）

*5 資料の略称等は次の通りである。［古今］古今和歌集声点本：秋永一枝 1972 による、［和名］和名類聚抄諸本：馬渕和夫編著『古写本和名類聚抄集成』勉誠出版,2008 の影印による、［名義］類聚名義抄諸本：図書寮本は勉誠社,1969 による影印・観智院本は天理図書館善本叢書 32-34,1976 の影印による、［色葉］前田育徳会尊経閣文庫本色葉字類抄：中田祝夫・峰岸明編,1977, 風間書房の影印による、［四座］四座講式：元禄版涅槃講式のみ（金田一春彦 1964 による）、［正節］平家正節：上野和昭 2000、上野和昭 2001、上野和昭 2011 による、［補忘］元禄版補忘記（白帝社,1962 の影印による、［近松］近松浄瑠璃本：坂本清恵 1987、坂本清恵 2000 による。各文献における声点や記号類は〈　〉に入れて示す。節博士等から解釈されるアクセント型のみ示す時は H ＝高拍、L ＝低拍などで示す。文献では漢字表記で仮名音形は示されないが解釈のために補う場合は（　）に記した。詳細は「漢語アクセントデータベース」アクセント史資料研究会 2011 を参照。

を変えた場合の数を記した。

表から、まず和語 1 拍名詞第 1 類相当の (1)0/H0/A、第 3 類相当の (12)1/L0/B に数の偏りがあることが分かる。一方、第 2 類相当の (3)0/H1/A に見られる 1 例は後に示すように第 1 類相当と見るべきで、この類別相当に分類される語は 1 例もない。この他に目立つのは (7)1/H0/A である。秋永が指摘するように東京で 1 型に変化しやすい傾向があるとすれば、このグループには元は 0 型だったものが含まれる可能性がある。

以下では上に示した (1)、(3)、(7)、(12）の具体例を分析する。

番号	対応（東/京/鹿）	語数	相当する類別	平安末期京都
(1)	0/H0/A	27（→ 30）	1 類	R,H
(2)	0/H0/B	4		
(3)	0/H1/A	1（→ 0）	2 類	F か
(4)	0/H1/B	0		
(5)	0/L0/A	0		
(6)	0/L0/B	2		
(7)	1/H0/A	29（→ 27）		
(8)	1/H0/B	7		
(9)	1/H1/A	3		
(10)	1/H1/B	2		
(11)	1/L0/A	2		
(12)	1/L0/B	9	3 類	L

表 4　1 字 1 拍漢語　対応パターン別集計

3.3　(1)0/H0/A（1 拍名詞第 1 類相当）、および (7)1/H0/A

語	東 (秋)	京 (楳)	京 (中)	平山	広韻	呉音	文献
威（イ）	1,0	H0	H0	1,0/H0/A	全清平	去	前
意（イ）	1,0	H0	MH0	1,0/H0/A	去	平	
我（ガ）	0	H0	H0	0/H0/A	次濁上	平	
気（キ：～は心）	0	H0	H0	0/H0/A	去	平	
愚（グ）	0,（新 1）	H0	H0	1,0/H0/A	次濁平	去	
差（サ）	1,0	H0	H0	0/H0/A	次清平	去	
詩（シ）	0	H0	H0	0/H0/A	全清平	なし	
痔（ジ）	0	H0	H0	0/H0/A	全濁上	なし	
紗（サ）	0	H0	H0	0/H0/A	全清平	なし	
朱（シュ）	0	H0	H0	0/H0/A	全清平	なし	

書（ショ：書物）	1	H0		0/H0/A	全清平	去	
書（ショ：文字）	0	H0	H0	0/H0/A	全清平	去	
序（ジョ）	0	H0	H0	0/H0/A	全濁上	平	
図（ズ）	0	H0	H0,L0s	0/H0/A	全濁平	なし	
頭（ズ）（～が高い）	0	H0	H0	0/H0/A	全濁平	去	
度（ド）（～が過ぎる）	0	H0	H0	0/H0/A	去	平	
度（ド）（～が進む）	0	H0	H0	0/H0/A	去	平	
碑（ヒ）	0	H0	H0	0/H0/A	全清平	なし	
譜（フ）	0	H0	H0	0/H0/A	全清上	なし	
麩（フ）	0	H0	H0	0/H0/A	次清平	なし	
分（ブ）（～が厚い）	0	H0		0/H0/A	去	平去	
分（ブ）（～が悪い）	0	H0	H0	0/H0/A	去	平去	
魔（マ）	0,（新 1）	H0	H0	0/H0/A	次濁平	去	
理（リ）	1,0	H0	H0	1,0/H0/A	次濁上	なし	前後
櫓（ロ）	0	H0	H0	0/H0/A	次濁上	なし	
炉（ロ）	0	H0	H0	0/H0/A	次濁平	なし	
絽（ロ）	0	H0	H0	0/H0/A	次濁上		

以下の語彙リスト[*6]に記したように、東（秋）においてアクセント型の新旧が不明であった「威」「意」「差」「理」は、平山輝男 1960 および中井幸比古 2002 の記載から、対応上は 0 型が古形にふさわしい。文献資料を見てみると、「威」は「イ（ヲ）」〈上〉〈斗(十)〉［四座］、「理」は〈上〉［古今］、H［正節］であって、これらが和語 1 拍名詞第 1 類相当という見方にそぐう。

次に (7)1/H0/A を見てみる。

語	東 (秋)	京 (楳)	京 (中)	平山	広韻	呉音	文献
奇（キ）	1	H0	H0	1/H0/A	全濁平	去	
機（キ）	1	H0	H0	1/H0/A	全清平	なし	
季（キ）	1	H0	MH0	1/H0/A	去	なし	前
九（ク）	1,（古 0）	H0	H0	1/H0/A	全清上	去	前後
卦（ケ）	1	H0	L0	1/H0/A	去	なし	
弧（コ）	1	H0	MXH0	1/H0/A	全濁平	なし	

*6 語彙リストにおける略号は次のとおりである。東（秋）…秋永による東京弁アクセント、京（楳）…楳垣実による京都アクセント。京（中）…中井幸比古 2002 記載の京阪式アクセント。略号は中井による。平山…『全国アクセント辞典』記載の東京/京都/鹿児島アクセント。広韻は広韻記載の声調（平・上・入は音節頭子音の別も）、呉音は注 4 に詳細を記した。文献は漢語アクセントデータベース（注 5）から、アクセントの体系変化前の資料に整合的に説明のつくデータが有れば「前」、変化後の資料にあれば「後」と記した。

五（ゴ）	1,（古 0）	H0	H0	1/H0/A	次濁上	平去	前後
史（シ）	1	H0	XH0	1/H0/A	全清上	なし	
士（シ）	1	H0	H0	1/H0/A	全濁上	平	
師（シ）	1	H0	H0	1/H0/A	全清平	去	
死（シ）	1	H0	H0	1/H0/A	全清上	平	
氏（シ）	1	H0	H0	1/H0/A	全濁上	平	
辞（ジ）	1	H0	H0	1/H0/A	全濁平	平	
蛇（ジャ）	1	H0	H0	1/H0/A	全濁平	去	
邪（ジャ）	1	H0	MH0	1/H0/A	全濁平	去	
主（シュ）	1	H0	H0	1/H0/A	全清上	平去	
種（シュ）	1	H0	MH0	1/H0/A	全　清上、去	平	
緒（ショ）	1	H0	MH0	1/H0/A	全濁上	なし	
署（ショ）	1	H0	H0	1/H0/A	去	なし	
知、智（チ）	1	H0	H0	1/H0/A	知全清平、智去	知去、智平	
著（チョ）	1	H0	0	1/H0/A	去	平	
覇（ハ）	1	H0	MXH0	1/H0/A	去	なし	
比（ヒ）	1	H0	H0	1/H0/A	全　清上、去	平	前
非（ヒ）	1	H0	H0	1/H0/A	全清平	去	
微（ビ）	1	H0	MXH0	1/H0/A	次濁平	去	
美（ビ）	1	H0	H0	1/H0/A	次濁上	平	前
負（フ）	1	H0	MXH0	1/H0/A	全濁上	平	
無（ム）	1	H0	H0	1/H0/A	次濁平	去	
和（ワ）	1	H0	MH0	1/H0/A	全濁平	去	

まず「九」「五」は秋永によって東京では 0 型が古形であることが示されているので、和語 1 拍名詞第 1 類相当とすべきである。文献資料からみても「九」に〈上〉［古今］、〈上〉［補忘］、「五」に〈上濁〉［古今］、〈上本濁〉［補忘］とある。

この他についてはどうか。「季」が漢音とすれば、広韻去声、〈去〉［色葉］が対応する。「比」も漢音とすれば、広韻去声、〈上〉［古今］。「美（び）」は音形・声調とも漢音系字音を反映するとすれば、広韻次濁上声で、文献資料では〈上濁〉［古今］が対応する。「非」は呉音だとすれば去声で、H［正節］。これらは、方言間の対応が認められるとすれば、東京では 0 型が期待され、第 1 類に相当する可能性もある。

3.4　1 拍名詞第 2 類相当【(13) 0/H1/A】

東京：京都：鹿児島でこの対応をなすものは、和語 1 拍名詞第 2 類に相当するが、奥村三雄 1974 や金田一春彦 1980a 他でも所属する漢語を立てていない。この問題は漢語における下降声調が日本語の下降拍にどのように受け止められたかということと関連すると考

えられる[*7]。

本分析ではただ 1 例、「胃」のみが該当している。

語	東 (秋)	京 (楳)	京 (中)	平山	広韻	呉音	文献
胃	0	H1、（新 H0）	H1,H0s 若,〈周〉H0	0/H1/A	去	去	

秋永はこの語について「唯一京都アクセントが H1 型の「胃」は、諸方言アクセントや「胃袋」の多用からみて変化した型と思う」とし、楳垣が H0 型を新とすることに疑義を呈している。中井幸比古 2002 では、近畿周辺部に古い型が残るとしている[*8]が、附属の CD データを見ると「胃」の項目について「〈筆〉0 も聞くが 1 が京都市内で伝統的か. 周辺部では 0 がほとんどだから,1 は京都の局地的なアか」と記載している。すなわち、中央部において H0 → H1 となったものがさらに関東共通語の影響を受けて若年層で H0 型化したという変化が想定され、それをどの段階で捉えるかが楳垣と中井の記載の違いをもたらしたと考えられるのである。

残念ながら文献資料には「胃」の記載がない。しかしこの語のアクセントの来源が中国語原音の去声に基づくものとすれば、R ＞ H の変化を経て和語 1 拍名詞第 1 類に相当する対応をなしていることになろう。

3.5　1 拍名詞第 3 類相当【(12) 1/L0/B】

東京：京都：鹿児島でこの対応をなすものは、和語 1 拍名詞第 3 類に相当する。諸方言間の対応からは「座」「地（じ）」の東京弁アは 1 型が古形にふさわしい。

下表では京都アクセントの認定に楳垣・中井・平山で若干の異なりが見られるが、L0 型とみなしておく。

語	東 (秋)	京 (楳)	京 (中)	平山	広韻	呉音	文献
絵（え）	1	L0	L0	1/L0/B	去	なし	後
科	1	L0	L0,H0	1/L0/B	次清平	なし	
課	1	L0	L0,H0	1/L0/B	去	なし	
区	1	H0、（L0 とも）	L0,H0s	1/L0/B	次清平	なし	
苦	1	L0、（H0 とも）	L0,H0s	1/L0/B	次清上	平	前後
座（～が白ける）	0,1	L0	L0,H0s	1/L0/B	去	平	後

[*7] 加藤大鶴 2018: 248-270 参照。

[*8] たとえば p.53 では「もし、室町時代・江戸時代の近畿中央部のアを復元しようとするならば、ほぼ、本辞典の〈周〉のアを採用すればよいことになる」としている。

四	1	L0	L0	1/L0/B	去	平	前後
地（じ）	1,0	L0	L0,H0s	1,0/L0/B	去	平	前後
二（に）	1	L0	L0	1/L0/B	去	平去	前後

平安末期京都方言でこれらがＬ型で発音されたとすると、多くは呉音声調を反映すると考えるべきだろう。音形では「絵（え)」「座（ざ)」「地（じ)」も呉音形を示している。文献資料では、「絵」R［正節］、「苦」「ク（ノ)」〈平十 (十)〉［四座］、R［正節］、「座」R［正節］、「四」〈平〉［古今］、〈平〉［補忘］、「地」「チ（ニ)」〈平濁〉〈十 (斗)〉［四座］、「二」〈平〉［古今］、〈平〉［補忘］とあり、現代諸方言と対応する。

4　2 拍漢語

4.1　音節構造による分析

以下では 1 字 2 拍の漢語を対象として、秋永による東京弁アクセントと楳垣による京都アクセントの型を、音節構造ごとに分類し数の偏りを見る。末拍がク・キ・ツ・チで終わるものを-KU、-KI、-TU、-TI、引き音（-uR、-eR、-oR）で終わるものを-R、広母音と狭母音からなる連母音（-aI、-uI）で終わるものを-VI、撥音（-aN、-iN、-uN、-eN、oN）で終わるものを-N で表す。なお同じ語に複数のアクセント型が現れる場合、それぞれを数えたので語数よりアクセント型の総数が多くなっている。

	0 型	1 型	2 型	合計
-KU	24	42	29	95
-KI	2	7	2	11
-TU	6	20	8	34
-TI	0	0	8	8
-R	18	247	0	265
-VI	4	36	0	40
-N	25	212	0	237
合計	79	564	47	690

表 5　音節構造別　2 拍（東ア）

東京弁のアクセントを音節構造によって分類した表 5 からは、まず秋永が指摘するように大多数（8 割）が 1 型で現れていることが見て取れる。通時的には、本来 0 型（平安末期京都 HH 型＞現代京都 H0 型に対応）であるものと 2 型（平安末期京都 HL 型および LL 型＞現代京都 H1 型に対応）であるものとが、1 型に流入していると推測される。-R、-VI、-N では 2 型がないが、これは末拍が特殊拍であるために高さの下がり目を担えず 1 拍前にずれたことを反映しているのだろう。平山で 1/H1/B の対応をなし、文献資料からも京都で LL ＞ HL の変化が認められるようなものは 2 拍名詞第 3 類相当であることが期待されるが、そのようなものを探すと、次が該当する。

-R　「行（広韻去・呉音去）」:「キヤウ（ス）」〈平濁〉〈十十十〉［四座］、（ぎゃう）HL［正節］　「相（広韻全清平・呉音平）」:「サウ」〈平〉〈十十〉［四座］、HL［正節］、〈平〉〈徵角〉［補忘］　「塔（広韻次清入）」:「タフ（ノ）」〈十十 (十)〉［四座］、HL［正節］、HL［近松］

-N　「案（広韻去・呉音去）」:「アンス」〈平平平〉［色葉］、HL［正節］　「信（広韻去・呉音平）」:〈平〉［色葉］、HL［正節］　「分（広韻去・呉音平去）」:「フン」〈平〉［色葉］、（ぶん）HL［近松］

これらは特殊拍でアクセントがずれない東京周辺方言（西伊豆等）で 2 型となることが期待される[*9]。

次に 2 型が-KU、-KI、-TU、-TI に偏っていることも目立つ。これらの音韻構造を持つ字は中国語原音では入声韻尾を持つもので、IMVF/T 構造の子音韻尾 F を CV に開いて日本語に定着した。末拍が CV 構造であることで（1 字 2 音節漢語における他の音節構造の語とは違って）東京アクセントにおいて高さが 1 拍前にずれず、伝統的な型を保っていると考えられよう。

楳垣京都アクセントを音節構造によって分類した表 6 からは、まず、これもよく知られるように H1 型が大多数（8 割）を占めていることが分かる。上野和昭 2011: 252 では近世で HH 型・LH 型だったものは現代で約半数が HL 型（本稿における H1 型）に変化していることが示されており、近世から現代にかけて H1 型化が進んだと考えられる。

次に-KU、-KI、-TU、-TI に H0 型が多い (2 割から 3 割)

	H0 型	H1 型	L0 型	L2 型	合計
-KU	25	58	1	1	85
-KI	3	8	0	0	11
-TU	7	24	0	0	31
-TI	4	12	0	0	16
-R	21	226	20	0	267
-VI	2	26	11	1	40
-N	16	184	36	0	236
合計	78	538	68	2	686

表 6　音節構造別　2 拍（京ア）

[*9] 近現代における変化としては、秋永による東京弁アで複数のア型を記載する例は 24 例、うち 1 型を含むものは 17 例であり、これらに 1 型への類推変化例が含まれる可能性はある。なお秋永は 8 例に新旧の別を記しており、うち 4 例を 1 型が新しいとしている。全体としてみれば近現代において生じている変化は、特殊拍による変化と比べれば微々たるものであることが分かる。

ことが見て取れる。これらは、通時的には H0 型が漢音入声軽（平安末期京都 HH 型、「宅（たく）」など）に、H1 型が漢音入声重および呉音入声（平安末期京都 LL 型＞ HL 型、「幕（まく）」など）にそれぞれ由来を持つことが推測される。

L0 型は-R、-VI、-N に集中している。これは通時的には中国語原音で去声、すなわち平安末期京都で LH で実現したであろう語群である。文献資料には「縁（広韻次濁平・呉音去）」「エン（ニ）」〈去〉〈十斗 (斗)〉［四座］、LH［近松］、「千（広韻次清平・呉音去）」「セン（ノ）」〈去〉〈十斗斗〉［四座］、LH［正節］、〈去〉［補忘］、LH［近松］などがある。

-R、-VI、-N は入声韻尾由来の語に比べて H1 型の比率が高いが、他のアクセント型から合流したものを多く含んでいることが推測される。

東/京/鹿	-KU	-KI	-TU	-TI	-R	-VI	-N	合計	類別相当
0/H0/A	9	3	3		5	1	4	25	1 類
0/H0/B	4		2		3	1		10	
0/H1/A	1		2		4		2	9	
0/H1/B					2			2	
0/L0/A					2		10	12	
0/L0/B	1		1			1	4	7	
1/H0/A	1							1	
1/H0/B	3							3	
1/H1/A	6	4	5	0	39	9	38	102	多数型
1/H1/B	11	0	5	0	71	6	54	147	〃
1/L0/A					3	1	5	9	
1/L0/B					8	6	15	30	4 類
2/H0/A	2							2	
2/H0/B	2							2	
2/H1/A	2			3				5	2 類
2/H1/B	21	1	2	4				28	3 類
2/L0/A								0	
2/L0/B						1		1	
合計	63	8	20	7	137	26	132	395	0

表 7　音節構造別　1 字 2 拍漢語（東京：京都：鹿児島ア）

平山輝男 1960 を用いて東京/京都/鹿児島の対応と、音節構造を概観したのが表 7 であ

るが、和語 2 拍名詞第 1・3・4 類に相当する部分にはある程度の語が集まっていることが見て取れる。第 2 類は平安末期京都で HL であったもの、すなわち平声軽音節を由来とする語が該当するはずであるが、数はわずかである。奥村三雄 1974・金田一春彦 1980a でも漢字 1 字 2 拍語にこのような対応をなす語群が設定できるか、慎重な立場をとっている。また第 5 類については漢字 2 字 2 拍語も含め該当する語が存在しないことが知られている。

最も目立つのは 1/H1/A の 102 例と 1/H1/B の 147 例であろう。すでに奥村ほかで言われるように、耳慣れない漢語や外来語は京都なら H1 型、東京なら 1 型で発音される傾向がある。この型はいわゆる多数型（基本型）であり、類推変化を引き起こす要因となっている。ただ 1/H1/A は、もとは第 1 類相当（0/H0/A）の対応をなしていたのが東京アクセントにおいて 0 型＞1 型の変化が生じた結果、このグループに含められている可能性もあるし、第 2 類相当（2/H1/A）についても似たような事情は考えられる。そう考えれば 1/H1/B についても第 3 類相当（2/H1/B）からの流入があるとみておいたほうが良いだろう。

以下では、平山の分類に基づき、和語 2 拍名詞第 1・2・3・4 類、および多数型である 1/H1/A と 1/H1/B の対応を取るものについて具体例を見ていく。

4.2　2 拍名詞第 1 類相当【0/H0/A】

語	東（秋）	京（楳）	京（中）	平山	広韻	呉音	文献
格（カク）	0	H1、（H0 とも）	H0,H1	0/H0/A	全清入	入	
客（キャク）	0	H0	H0	0/H0/A	次清入	入	
急（キュー）	0	H0	H0	0/H0/A	全清入	入	
曲（キョク：～がない）	0	H0		0/H0/A	次清入	入	
骨（コツ：～が分かる）	0	H0		0/H0/A	全清入	入	
三（サン）	0	H0	H0	0/H0/A	全清平	去	
直（ジキ：～に）	0	H0	H0,L0s	0/H0/A	全濁入	入	
順（ジュン）	0	H0	H0	0/H0/A	去	平	
職（ショク）	1	H0	H0,H1s	0,2/H0/A	全清入	入	
食（ショク：～が進む）	0	H0	H0,H1s	0/H0/A	全濁入	入	
席（セキ）	1	H0	H0,H1 若	1,0/H0/A	全濁入	入	
俗（ゾク：俗人）	0	H0	H0,H1s	*0/H0/A	全濁入	入	
俗（ゾク：風俗）	1	H1		0/H0/A	全濁入	入	
宅（タク）	0	H0	H0	0/H0/A	全濁入	入	

敵（テキ）	0	H0	H0	0/H0/A	全濁入	入	
点（テン）	0	H0	H0,〈周〉H1p	0/H0/A	全清上	平	
得（トク）	0	H0	H0	0/H0/A	全清入	入	
徳（トク）	0	H0	H0	0/H0/A	全清入	入	前後
肺（ハイ）	0	L0	L0	0/H0/A	去	なし	
晩（バン）	0	H0	H0	0/H0/A	次濁上	なし	前後
票（ヒョー）	0	H0	L0,H0	0/H0/A	去	なし	
表（ヒョー）	0	H0	H0,L0s	0/H0/A	全清上	去	
棒（ボー）	0	H0	H0	0/H0/A	全濁上	なし	前後
陸（リク）	2	H0	H0	0,2/H0/A	次濁入	入	
礼（レー：謝礼）	0	H0	H0,L0若	0/H0/A	次濁上	平	

これらは奥村三雄 1974 の認定と多くが重複する（「格」「客」「急」「曲」「骨」「三」「直」「順」「職」「食」「席」「俗」「宅」「敵」「点」「得」「晩」「表」「票」「棒」「陸」「礼」）。入声に由来する 14 例は漢音入声軽に由来するものであれば HH であるから、対応にかなうと見ることができる。例えば「徳」:「トク（ヲ）」〈徳〉〈斗斗 (斗)〉［四座］、〈入軽〉〈徴〇〉［補忘］、「晩」:〈上〉［色葉］、（ばん）HH［近松］　「棒」:「俗音ハ〈上濁〉ウ〈上〉」［名義］、「ハウ」〈上濁〉［色葉］、HL［近松］など。

しかし由来からすれば現代京都で H1 型がふさわしいのではと疑われるものもある。「骨」:「コツ」〈入〉［色葉］、HL［近松］　「俗」:〈入〉［古今］、HL［正節］など。これらが呉音系字音に基づくとすれば平安末期京都では LL で発音されたことになるから、アの体系変化を生ずれば HL 型に変化することになる。

また「三」のように〈上〉［古今］、LH［正節］、〈上〉［補忘］と両様現れるものもあるが、これは個別的な問題と考えたい。

4.3　2 拍名詞第 2 類相当【2/H1/A】

語	東（秋）	京（楳）	京（中）	平山	広韻	呉	文献
一、壱（イチ）	2	H1	H1	2/H1/A	全清入	入	
七（シチ）	2	H1	H1	2/H1/A	次清入	入	
八（ハチ）	2	H1	H1	2/H1/A	全清入	入	
百（ヒャク）	2	H1	H1	2/H1/A	全清入	入	
六（ロク）	2	H1	H1	2/H1/A	次濁入	入	

平山の認定による東京 2/京都 H1/鹿児島 A という対応は 2 拍名詞第 2 類相当である。そのように対応するものは「一（いち）」、「七（しち）」、「八（はち）」、「百（ひゃく）」、「六（ろく）」である。漢語 1 字 2 拍のものでこの対応を示すものは他に比して規則性は低

く*10、また金田一春彦 1974: 117 では「一」「七」「八」「六」はいずれも鹿児島アクセントを B 型と記載しており、第 3 類相当であるとしている。これらはいずれも呉音入声を由来とすることが推測されるもので、第 3 類相当としたほうが辻褄があう。

4.4　2 拍名詞第 3 類相当【2/H1/B】

語	東（秋）	京（楳）	京（中）	平山	広韻	呉音	文献
学（ガク）	0,1	H1	H1	2,1/H1/B	全濁入	入	
楽（ガク）	0,1	H1	H0,H1	2,1/H1/B	次濁入	入	前後*
吉 (キチ:凶の対)	2	H1	H1	2/H1/B	全清入	入	
柵（サク）	1,（新 2）	H1	H1	2,1/H1/B	次清入	入	
式（シキ）	2	H1	H1	2/H1/B	全清入	入	
軸（ジク）	2	H1	H1	2/H1/B	全濁入	入	
質（シツ）	2	H1	H1	2/H1/B	全清入	入	
実（ジツ）	2	H1	H1	2/H1/B	全濁入	入	前
尺（シャク：～が足りない）	2	H1	H1	2/H1/B	次清入	入	
術（ジュツ）	2	H1	H1	2,1/H1/B	全濁入	入	
毒（ドク）	2	H1	H1	2/H1/B	全濁入	入	前後
肉（ニク）	2	H1	H1	2/H1/B	次濁入	入	
罰（バツ・バチ）	2	H1	H1	2/H1/B	全濁入	入	
撥、桴（バチ）	2	H1	H1	2/H1/B	全清入	入	
副（フク）	2	H1	H1	2/H1/B	次清入	入	
服（フク）	2	H1	H1	2/H1/B	全濁入	入	
福（フク）	2	H1	H1	2/H1/B	全清入	入	
複（フク）	2	H1	MXH1	2/H1/B	全清入	入	
幕（マク）	2	H1	H1	2/H1/B	次濁入	入	
膜（マク）	2	H1	H1	2/H1/B	次濁入	入	
脈（ミャク）	2	H1	H1	2/H1/B	次濁入	入	
厄（ヤク）	2	H1	H1	2/H1/B	全清入	入	
役（ヤク）	2	H1	H1	2/H1/B	次濁入	入	
欲（ヨク）	2	H1	H1	2/H1/B	次濁入	入	

これらは奥村三雄 1974 の認定と多くが重複する（「吉」「柵」「式」「軸」「実」「尺」「術」「毒」「肉」「熱」「撥」「副」「服」「福」「複」「幕」「膜」「脈」「厄」「役」「欲」）。この語群には入声由来の語しかなく、呉音形が比較的多く見られるのが特徴的である。呉音系字音に基づく入声は、平安末期京都で LL 型に実現したことが知られ、現代語との対応にもそぐう。

文献資料にもこのことを支持するデータが見られる。「実」:〈入軽〉［古今］、〈入〉［古今］、「シツ（ニ）」〈入濁〉〈十十 (斗)〉［四座］　「毒」:「ト〈平濁〉ク〈平〉」［色葉］

*10 奥村三雄 1974 では「金（キン）」「天（テン）」の 2 語のみを挙げるにとどまり、金田一春彦 1980a ではそもそも和語名詞第 2 類に相当する語がいくつかあることを示唆するにとどまっている。

「罰」:（ばち）HL［正節］など。「楽（ガク）」:〈入濁〉［古今］、「カ〈平濁〉ク〈平〉」［色葉］、HH［正節］は、体系変化前はよいが後はそぐわない。「楽」（「学」も）は秋永は 2 型を認めていない。「楽」がもし漢音形も残していれば HH 型との説明は可能である。秋永は「柵」も 2 型を新しい形としているが、金田一春彦 1980a でも 2 型を採用している。

4.5　2 拍名詞第 4 類相当【1/L0/B】

語	東（秋）	京（楳）	京（中）	平山	広韻	呉音	文献
縁（エン：えにし）	1	L0	L0	1/L0/B	去	去	前後
縁（エン：縁側）	1	H1	H1	*1/L0/B	去	去	
恩（オン）	1	L0	L0	1/L0/B	全清平	去	
会（カイ）	1	L0	L0	1/L0/B	去	平	
害（ガイ）	1	L0	L0	1/L0/B	去	平	
藝（ゲー）	1	L0	L0	1/L0/B	去	なし	後
剣（ケン）	1	H1	L0,H1 若	1/L0/B	去	去	後
険（ケン：～がある）	1	H1	L0,H1s	1/L0/B	全清上	平	
心（シン）	1	L0	H1,L0	1/L0/B	全清平	去	前
新（シン）	1	H1、（L0 とも）	L0,〈周〉 L2p	1/L0/B	全清平	去	
新（新の正月の時）	1	L0		1/L0/B	全清平	去	
芯（シン）	1	L0	L0	1/L0/B	全清平	なし	
銭（ゼニ）	1	L0	L0	1/L0/B	全濁平	なし	
千（セン）	1	L0	L0	1/L0/B	次清平	去	前後
代（ダイ：世代、治世、代人）	1	L0	L0	1/L0/B	去	なし	
台（ダイ）	1	L0	L0	1/L0/B	全濁平	去	
題（ダイ）	1	L0	L0	1/L0/B	全濁平	なし	
中（チュー）	1	H0	L0	1/L0/B	全清平	去	後
町（チョー）	1	L0	L0	1/L0/B	次清上	なし	前
腸（チョー）	1	L0	L0	1/L0/B	全濁平	なし	
堂（ドー）	1	L0	L0,H1s	1/L0/B	全濁平	去	
胴（ドー）	1	L0	L0	1/L0/B	去	なし	後
念（ネン）	1	L0	L0	1,0/L0/B	去	平	
倍（バイ）	1,0	L0	L0,〈周〉 H0s,H1s	0,1/L0/B	全濁上	平	
判（ハン）	1	L0	L0,H1s	1/L0/B	去	なし	
番（バン）	1	L0	L0	1/L0/B	次清平	なし	後
盤（バン）	1	L0	L0	1/L0/B	全濁平	なし	
鋲（ビョー）	1	L0	L0	1/L0/B	国字	なし	
糞（フン）	1	L0	L0	1/L0/B	去	去	
紋（モン）	1	L0	L0	1/L0/B	次濁平	なし	

これらは奥村三雄 1974 の認定と多くが重複する（「縁」「恩」「会」「害」「藝」「剣」「心」「新」「千」「代」「台」「題」「中」「町」「腸」「「堂」「胴」「念」「倍」「判」「番」「盤」「糞」）。この語群は平安末期京都において去声、LH 型で実現したと考えられるため、入声字は含まれない。「会」は音形・声調が漢音系字音に基づき、「台」は音形・声調が呉音系字音に基づく。いずれの字音声調においても去声が該当する。

ただ、京都アクセントの認定で揺れるものがいくつかある。中井幸比古 2002 では「剣」「険」「心」「堂」「倍」に L0 型以外も認定している。楳垣でも「剣」「険」は H1 型、「中」は H0 型としている。文献資料からは「剣」に LH［正節］とあり、L0 型のほうが古形であると考えられる。そのほかについては原音声調との関係で説明をつけられなくはないが、いずれが対応関係を担っているかはよく分からない。

文献資料では、「縁」:「エン（ニ）」〈去〉〈十斗 (斗)〉［四座］、LH［近松］　「藝」:（げい）LH［近松］　「剣」: LH［正節］　「心」:「心〈去〉乃〈上〉波〈平〉之〈平〉良〈上〉」［和名］　「千」「セン（ノ）」〈去〉〈十斗斗〉［四座］、LH［正節］、〈去〉［補忘］、LH［近松］　「中」:〈去〉〈角徴〉［補忘］、（ちう）LX［近松］　「町」:〈去〉［色葉］　「胴」: LX［近松］　「番」: LX［近松］など、いずれも方言間の対応にそぐう。

4.6　多数型【1/H1/A】および【1/H1/B】

多数型である 1/H1/A のうち、0/H0/A（2 拍名詞第 1 類相当）から類推変化した可能性があるものを次に掲げる。演繹的には漢音上声字か入声軽字が該当するので、これらを抜き出した。

語	東（秋）	京（楳）	京（中）	平山	広韻	呉音	文献
域（イキ）	1	H1	H1	1/H1/A	次濁入		
億（オク）	1	H1	H1	1/H1/A	全清入		
感（カン）	1	H1	H1	1/H1/A	全清上	平	前後
級（キュー）	1	H1	H1	1/H1/A	全清入		
決（ケツ）	1	H1	H1	1/H1/A	全清入		
産（サン：出産）	0	H0	MH0,H1	1/H1/A	全清上	平	
産（サン：出生地）	1	H1	MH0,H1	1/H1/A	全清上	平	
髄（ズイ）	1	H1	H1,〈周〉L0s,L2s	1/H1/A	全清上	平去	
積（セキ）	1	H1	H1	1/H1/A	全清入		
節（セツ）	1,（時は古 0）	H1	H0,H1s	1/H1/A	全清入	入	前後
説（セツ）	1,（古 0）	H0	H0,H1s,〈周〉H1	1,0/H1/A	全清入	入	
体（タイ）	1	H1	H1	1/H1/A	次清上	平	

卓（タク）	1	H1、（H0 とも）	H0,H1s	1/H1/A	全清入	
短（タン）	1	H1	H1	1/H1/A	全清上	去
暖（ダン：～をとる）	1	H1	H1	1/H1/A	次濁上	平
某（ボー）	1	H1	H1	1/H1/A	次濁上	平
約（ヤク）	1	H1	H1	1/H1/A	全清入	
翼（ヨク）	1	H1	MH1	1/H1/A	次濁入	
猟（リョー）	1	H1	H1	1/H1/A	次濁入	
墨（ルイ）	1	H1	H1,〈周〉L0p	1/H1/A	次濁上	なし
列（レツ）	1	H0、（H1 とも）	H0,H1 若	1/H1/A	次濁入	

まず現代京都アクセントについて見ると、「産」「節」「説」「卓」「列」について楳垣、中井は H0 型も認めている。文献資料では「節」:「セツ」〈上上〉［色葉］、（せつ）HX［正節］とあり、古形は H0 型と認めてもよいかもしれない。秋永も東京アについて「節」「説」を古形 0 型と記すほか、「産」を 0 型としている。また「暖」「某」は音形が漢音であるから声調も同系であるとすれば H0 型を古形と認めることもできるか。「感」も文献資料に〈上〉［古今］、「カ〈上〉ム〈上〉ス［色葉］、「カン」〈上〉〈斗斗〉［四座］、「かん（に）」HH（H）［正節］とある。

次に同じく多数型である 1/H1/B のうち、2/H1/B（2 拍名詞第 3 類相当）から類推変化した可能性があるものを見る。まず入声字のみを下記に示す。

語	東（秋）	京（楳）	京（中）	平山	広韻	呉音	文献
角（カク：かど、四角）	2	H1	H1	1,2/H1/B	全清入		
角（カク：将棋）	2,0	L2	L2,H1 若	1,2/H1/B	全清入		
角（カク：数学）	1,2	H1？	H1,〈周〉L2p	1,2/H1/B	全清入		
策（サク）	1,（新 2）	H1	H1,H0s	1/H1/B	次清入		
塾（ジュク）	1	H1	H1	1,2/H1/B	全濁入		
着（チャク）	1	H1	H0,H1s	1/H1/B	全清・全濁入		
罰（バツ）	1	H1	H1	1/H1/B	全濁入		
密（ミツ）	1	H1	H1	1/H1/B	次濁入		
蜜（ミツ）	1	H1	H1	1/H1/B	次濁入		前
訳（ヤク）	1	H1	H1,H0s	1/H1/B	全清入		
率（リツ）	1	H1	H1	1/H1/B	次濁入	入	

略（リャク）	1	H0	H0,H1 若	1/H1/B	次濁入

秋永は「角」に東京式ア 2 型を認めており、平山でも 1 型と 2 型を認める。「塾」も平山は東京式アに 1 型と 2 型を認めている。奥村三雄 1974 では「塾」（「策」も）を 2/H1/B としている。文献資料では「蜜」「此間云美〈平〉知〈平〉」［和名］、此間云ミ〈平〉チ〈平〉［名義］とあり、2 拍名詞第 3 類相当とみなしたくなるが、金田一春彦 1980a では諸方言間の対応が整合的でないとして類別相当から外している。

多数型のうち音節構造-R,-VI,-N のものは 130 例を超えてしまうので、ここでは呉音で平声であり、かつ近世京都アで HL 型であることが文献資料で確かめられるもののみを掲げる。

語	東（秋）	京（楳）	京（中）	平山	広韻	呉音	文献
願（ガン）	1	H1	H1	1/H1/B	去	平	後
信（シン）	1	H1	H1	1/H1/B	去	平	前後
相（ソー）	1	H1	H1	1/H1/B	全清平	平去	前後
像（ゾー）	1	H1	H1	1/H1/B	全濁上	平	前後
損（ソン）	1	H1	H1	1/H1/B	全清上	平	後
任（ニン）	1	H1	H1,L0s	1/H1/B	去	平	後
分（ブン）	1	H1	H1	1/H1/B	全清平	平去	前後
用（ヨー）	1	H1	H1	1/H1/B	去	平 後	

文献資料では、次の通り。「願」: HL［正節］　「信」:〈平〉［色葉］、HL［正節］　「相」:「サウ」〈平〉〈十十〉［四座］、（さう）HL［正節］、〈平〉〈徴角〉［補忘］　「像」:「〇ウ」〈平濁〉〈十十〉［四座］、（ざう）HL［正節］　「損」: HL［正節］、HL［近松］　「任」:（にん）HL［正節］　「分」:〈平〉［色葉］、（ぶん）HL［近松］　「用」: HL［正節］

多数型の語群には他の型から流れ込んでいるものがあることは明らかだが、それをどのように明らかにしていくかについては課題が多い。

5　まとめと課題

本稿では、現代諸方言の漢語アクセントが中国語原音の伝統性をどれほど反映しているかについて、(1) 東京・京都・鹿児島における漢語アクセントの対応関係、(2) 異なる音節構造ごとのアクセント型の偏り、(3) 文献資料との対応関係（中国語の原音声調含む）の 3 つの観点から分析を行ってきた。分析を通して明らかになったことは次の 4 点である。

(1) 1 字 1 拍漢語では和語 1 拍名詞第 1・3 類に相当する対応関係が見られる。

(2) 1 字 2 拍漢語では和語 2 拍名詞第 1・3・4 類に相当する対応関係が見られる。

(3) 1 字 2 拍漢語では対応関係の現れ方が音節構造と関連している。

(4) 1 字 1・2 拍漢語とも多数型が存在し、もとは別の対応関係にあったと考えられる語が流入している。

こうした傾向そのものは先行研究で指摘されてきたことと大筋で同じである。しかし具体例を個別に見ていくと、各方言（特に東京と京都）におけるアクセント型の認定に揺れやずれがあるために、対応関係の認め方にも定まらない部分があることが分かった。

より精度を上げて対応関係を探るには、少なくとも 3 つの方言それぞれについて複数のアクセントデータを参照する必要がある。幸いにも京阪式アクセントについては中井幸比古 2002 や秋山英治 2017、上野和昭 2011 などによって概ね古形を求めることができるが、東京アクセントについてはこれまで刊行された古いアクセント資料をデータベース化し対照可能にしておく必要があると考えられる[*11]。

また辞書は東京のアクセントを反映しているとまずは考えられるから、京阪式アクセントとよく対応する東京式アクセントについては甲府や佐久等のアクセントも考慮すべきであろう。さらに東京アクセントの泣き所は特殊拍が高さの下がり目を担えないために、-R,-VI,-N の 2 型がすべて 1 型に合流してしまっていることにある。金田一春彦 1980a に示される下がり目がずれない西伊豆等の方言も視野に入れつつ、調査語彙を定めていく必要があるだろう。

参考文献

秋永一枝 1972 『古今和歌集声点本の研究　資料篇』校倉書房

——— 1996 「東京弁における「気」のアクセント (特集「気」の語句)」日本語学 15-7（秋永一枝 1999『東京弁アクセントの変容』所収「VIII 字音一字語のアクセント」）

——— 1998『楳垣京都アクセント基本語資料：東京弁アクセント付き』アクセント史資料研究会

秋山英治 2017 「漢語類別語彙の検討」音声研究 21-3

アクセント史資料研究会（編） 2011 『漢語アクセント史データベース』http://www.f.waseda.jp/uenok/accent.html

上野和昭（編） 2000 『平家正節　声譜付語彙索引（上）』アクセント史資料研究会

——— 2001 『平家正節　声譜付語彙索引（下）』アクセント史資料研究会

上野和昭 2011 『平曲譜本による近世京都アクセントの史的研究』早稲田大学出版部

奥村三雄 1955 「東西アクセント分離の時期―外来語のアクセント」国語国文 24-12

[*11] 奥村三雄 1974 において東京式アクセントの認定に用いられたのは、山田美妙 1893 編『日本大辞書』, 日本大辞書発行所、神保格・常深千里編 1932『国語発音アクセント辞典』, 厚生閣、日本放送協会編 1951『日本語アクセント辞典』、金田一京助編 1952『明解国語辞典（改訂版）』三省堂、金田一春彦監修 1958『明解日本語アクセント辞典』三省堂、平山輝男編 1960『全国アクセント辞典』東京堂出版である。金田一春彦 1980a では、神保格・常深千里編 1932 と NHK『日本語アクセント辞典』（出版年は不明）を用いている（その記載は金田一春彦 1980b にある）。東京式アクセントの推定には少なくともこれらの辞書は参照しなければならないだろう。

――― 1961 「漢語のアクセント」国語国文 30-1
――― 1974 「諸方言アクセント分派の時期―語アクセントの研究―」広島方言研究所紀要方言研究叢書 3
加藤大鶴 2018 『漢語アクセント形成史論』笠間書院
蒲原淑子 1989 「漢語アクセントの一性格―『平家正節』を資料として―」活水日文 19
金田一春彦 1937 「現代諸方言の比較から観た平安朝アクセント―特に二音節名詞に就て―」方言 2-
――― 1964 『四座講式の研究:邦樂古曲の旋律による國語アクセント史の研究各論 (1)』三省堂
――― 1974 『国語アクセントの史的研究　原理と方法』塙書房
――― 1980a 「味噌よりは新しく茶よりは古い―アクセントから見た日本祖語と字音語―（上）」月刊言語 9-4
――― 1980b 「服部博士へのお答え」月刊言語 9-6
坂本清恵 1987 『近松世話物浄瑠璃　胡麻章付語彙索引体言篇』アクセント史資料研究会
坂本清恵 2000 『中近世声調史の研究』笠間叢書笠間書院
中井幸比古 2002 『京阪系アクセント辞典』勉誠出版
平山輝男 1960 『全国アクセント辞典』東京堂
前田広幸 1998 「現代大阪語字音語アクセントの式分析―非入声呉音漢音二重語字音要素で始まる語群を中心に」女子大文学国文編 49
――― 1999 「現代大阪語における字音語アクセントの型分布状況：『大阪・東京アクセント音声辞典』を用いた調査報告」女子大文学国文編 50
――― 2000 「語形からみた一字漢語のアクセントと類別語彙」女子大文学国文編 51

［かとう　だいかく、跡見学園女子大学文学部准教授］